

ヨハネによる福音書21章 「イエスの再召命」

1A 三度目の現れ 1-14

1B 漁に戻る弟子たち 1-3

2B イエス主導の漁 4-8

3B イエスとの朝食 9-13

2A 羊飼いへの召命 15-23

1B 三度の愛の確認 15-19

2B 各々を呼ばれる方 20-23

3A ヨハネの証言 24-25

本文

ヨハネによる福音書 21 章です。ヨハネの福音書が今日で、終わりとなりますが、この章は、次の使徒の働きに続く、とても貴重な、つなぎの章と言ってもよいでしょう。使徒ヨハネは、20 章にて、福音書全体のまとめをしています。20 章で終わってもおかしくなかったのですが、「あとがき」として 21 章を付け足して語っています。

20 章にて、主は、「父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」と言われました。そして息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい。」と言われます。彼らが御霊によって新しくされた瞬間です。こうやって、彼らの内に御霊によって新たにされて、それから、世界に福音を伝える備えをしておられます。そして、主は福音を伝える命令を出されただけでなく、ペテロに対しては、「羊を飼いなさい」という命令を出されます。

ピリポ・カイサリアで、ペテロがイエス様を、「あなたは生ける神の子キリストです。」と告白した後で、イエス様は、「**マタ 16:18 わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。**」と言われました。そのペテロの告白の上に、ご自身の教会を建てると言われました。また、「**16:19 わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。**」とも言われました。ペテロが、誕生したばかりの教会の指導者となることを予告しておられたのです。その働きに備えるために、イエス様はペテロの漁を通して、再びご自身の力を現されます。

1A 三度目の現れ 1-14

1B 漁に戻る弟子たち 1-3

¹ その後、イエスはティベリア湖畔で、再び弟子たちにご自分を現された。現された次第はこうであった。

20 章にて、イエス様は二度、弟子たちのいるところでご自身を現わしました。初めは、週の初めの日の夕方、彼らがユダヤ人を恐れて戸に鍵をかけているところで、真ん中に立って現れてくださいました。ところが、そこにトマスがいませんでした。彼は、イエス様の釘の跡に指を入れ、またその脇腹に手を入れて見なければ、信じないと言いました。それで八日目に、イエス様が再び現れたのです。これが二度目でした。

そして、主は三度目に、「ティベリア湖畔で、再び弟子たちにご自分を現された」とあります。午前礼拝で説明しましたように、主は十字架に付けられる前から、ご自身がよみがえられたら、「マタ 26:32 あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」と言われていました。主は、最後はエルサレムの東にあるオリーブ山から昇天されるのですが、その前にガリラヤに行って、弟子たちと会うことにしておられました。そこで、ご自身の宣教が始まったからです。そこで、弟子たちは福音宣教とは何かを学んだのです。主が、聖霊を彼らに遣わしてください、ご自身が彼らの福音宣教の働きによって、働かれることを意図しておられました。ですから、その働きの継続を意識しておられて、ガリラヤで会うことを考えておられました。マタイ 28 章には、十一人の弟子たちが、イエス様の指示にしたがって、ガリラヤのある山に登ったとあります。そして、大宣教命令を主は出されました。「マタ 28:18-20 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子となさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

主が、この命令を出される前、弟子たちがガリラヤに行き、主とお会いするのを待っていた時のことがヨハネ 21 章に書かれていると思われます。「ティベリア湖畔」とありますが、これは、ガリラヤ湖のことです。

² シモン・ペテロ、デドモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、そして、ほかに二人の弟子が同じところにいた。

今この場には、十一人すべてがいたわけではありません。トマスがいます。そして、「1:46 ナザレから何か良いものが出るだろうか。」と言ったナタナエルがいます。そして、ゼベダイの子たちですが、ヨハネとヤコブです。そして、名の記されていない二人の弟子たちがいます。合計七人です。

³ シモン・ペテロが彼らに「私は漁に行く」と言った。すると、彼らは「私たちも一緒に行く」と言った。彼らは出て行って、小舟に乗り込んだが、その夜は何も捕れなかった。

衝動的に動くペテロが、またここで見えます。イエス様を待っていたけれども、待ちきれなくなった

のでしょう、「私は漁に行く」と言いました。彼は天然に、人々を引っ張るリーダーシップの力を持っていますから、他の弟子たちも一緒に漁に行ってしまうています。

ペテロが、イエス様に召される前の姿に戻っているかのような行動です。シモンとアンデレをイエス様が、ついて来なさいと呼ばれた時に、「マルコ 1:18 彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。」とあります。このように、すべてを捨てて主に従っていたのに、その前のことを行い始めました。主がおられないと感じる時に、前の生活に戻ることはしばしば起こりますね。イスラエルの民が、シナイ山の麓にいた時に、モーセがなかなか降りて来ないので、エジプトの時の金の子牛を造って、その周りで戯れました。

しかし、主の憐れみは、ここから始まります。主に捕らえられている人は、自分が前の生活に戻ろうとも、それが空回りするように敢えてされます。以前の仕事、以前の生活をして、前のよううまく行かないのです。この時、「その夜は何も捕れなかった」とあります。そして、「夜」ということにも、これまでのヨハネの福音書にもあったように、意味深な響きがあります。夜は闇の力を象徴し、隠れて行っていることを表しています。世に戻ったところで、そこでの努力は徒労に終わることを示しているかのようです。

2B イエス主導の漁 4-8

⁴夜が明け始めていたころ、イエスは岸辺に立たれた。けれども弟子たちには、イエスであることが分からなかった。⁵イエスは彼らに言われた。「子どもたちよ、食べる魚がありませんね。」彼らは答えた。「ありません。」

主の復活をマグダラのマリアや女たちが知ったのも、「夜が明け始めていたころ」でした。そこから、新しい始まりが始まり、主の御霊による希望に満ちた働きが始まります。主は、岸辺に立たれていましたが、弟子たちはイエス様であることに気づいていません。他のいろいろな箇所でもそうでしたね、マグダラのマリアは、イエス様が初めに声をかけた時に、園の番人だと思いました。弟子たちは、イエス様の復活における容姿よりも、パンを裂く時の仕草とか、「マリア」と呼ぶ声であるとか、これまでの共に生活をして得たものによって、イエス様だと分かります。

主は、親しみを込めて「子どもたちよ」と呼びますね。そして、食べる魚がありませんね、と言われていますが、これは尋ねているというよりも、彼らに漁に全く成果がでなかったことを認識させるものです。主はすでに弟子たちに語られていました、「15:5 わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」主は、このことに気づいてほしかったのだと思われます。ペテロは、これから使徒の働きを見れば分かりますが、教会における指導者になって、いろいろな働きをします。けれども、彼がしているのではなく、彼と共におられる主がしておられるのです。主が働かれるには、自分には何もできないことを知ること。そして、主がともにおられて、主が働かれることを知

っていることが大事です。

⁶ イエスは彼らに言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば捕れます。」そこで、彼らは網を打った。すると、おびたしい数の魚のために、もはや彼らには網を引き上げることができなかった。

主導権がペテロから、イエス様に移りました。職業としての誇りをもっていたペテロです。しかし、そのペテロが、まだ誰だか分からない人に言われた指示に従って、舟の右側に網を打ってみました。そうしたら、一匹も捕れなかったところから、一気におびたしい数の魚が網の中に入っていました。もう引き上げることのできないほどです。これが、肉の力で生きている時と、御霊に導かれることの大きな違いです。御霊に導かれる手前には、自分に限界があるという惨めな姿があります。自分には何もできない、これではだめだと思っているその矢先が、実は主のこれまでにない大いなる恵みを知る時なのです。

⁷ それで、イエスが愛されたあの弟子が、ペテロに「主だ」と言った。シモン・ペテロは「主だ」と聞くと、裸に近かったので上着をまとい、湖に飛び込んだ。⁸ 一方、ほかの弟子たちは、魚の入った網を引いて小舟で戻って行った。陸地から遠くなく、二百ペキスほどの距離だったからである。

「イエスが愛されたあの弟子」とは、ヨハネのことですね。ヨハネは、自分のことを語る時に、このようにして、自分がイエスに愛された弟子なのだとか明かしているのです。この方のそばにいて、この方に愛されているという自負がありました。こう書いている時、ヨハネはおそらくは 90 代のおじいさんです。それでも、自分をどれほど主が愛しておられるのかを知っていました。最近、ある若い兄弟の救いの証しを聞きましたが、彼はずっと自分はだめな人間だと思っていました。けれども、クリスチャンの父がこういったのを聞いて、大きな転機を迎えたそうです。「お前が地球上で、立って一人の人間だったとしても、それでも神はお前のためにイエス様を地上に遣わしただろう。」そうなんです、神の愛とは「大勢いる中の一人」ではないのです。それぞれが、自分こそが愛されているという保証と確信がある、そういう愛です。

ヨハネは、イエス様の墓において、そこにご遺体がなく、頭を包んでいた布と亜麻布が別のところに置かれていた様子を見て、信じました(10:8)。肉眼で見えるものだけでなく、その意味するところを理解する目を持っていたということです。ここでは、「主だ」と言っています。この大漁の奇跡は、既視感がいっぱいです。ルカの福音書 5 章で、ペテロ、またヨハネやヤコブは、イエス様が深みに漕ぎ出し、網を降ろして魚を捕りなさいと言われて、その通り行ったら、「5:6 おびたしい数の魚が入り、網が破れそうになった。」とあります。その時も、夜通し漁をしていたけれども、一匹も捕れていなかったのです。そこでヨハネは、「主だ！」と叫んだのです。

衝動的なペテロは、なんと湖に飛び込んで、岸辺まで泳いでいきました。「裸に近かった」とありますが、中東で聖書の時代ですから、今の感覚で言ったら、きちんと着ていたでしょう。上着を身に着けていない時に、裸に近いという言い方をします。いずれにしても、それではイエス様にお会いするのにあまりにも失礼だから、きちんと上着を着て、それで泳いでいくのです。マグダラのマリアは、イエス様だと分かるとしがみつきましたが、ペテロは、舟が岸辺に着くのを待たずして、はやくイエス様に会いたいと思い、急ぎました。ただ、彼らは沖に出て行っていません、岸辺から二百ペキスですから、約 90 ㍎の距離です。

3B イエスとの朝食 9-13

⁹ こうして彼らが陸地に上がると、そこには炭火がおこされていて、その上には魚があり、またパンがあるのが見えた。¹⁰ イエスは彼らに「今捕った魚を何匹か持って来なさい」と言われた。¹¹ シモン・ペテロは舟に乗って、網を陸地に引き上げた。網は百五十三匹の大きな魚でいっぱいであった。それほど多かったのに、網は破れていなかった。

三度目に現れた主は、弟子たちを食事に招かれています。炭火で魚とパンを焼いておられました。そして、今捕った魚を何匹か持って来なさいと言われていています。ペテロはやはり、リーダーシップがありますね、自分で舟に乗り直して、網を陸地に引き上げています。そして、魚の数、153 匹ですが、ここに大きな霊的な意味はないでしょう。漁師たちは、分け前を自分たちの間で分配するのに、一匹ずつ数えるのが習慣になっていました。ここでは、具体的な数字によって、本当に魚がそれだけ捕れたことを示していると思われます。しかも、大きな魚です。主のなされていることは、素晴らしいです。また、網を破るほどではありませんでした。これも恵みの豊かさを表していますね、破れていたら、恵みが恵みではなくなります。主は、私たちが受け取ることのできないまでには、なされません。

¹² イエスは彼らに言われた。「さあ、朝の食事をしなさい。」弟子たちは、主であることを知っていたので、だれも「あなたはどなたですか」とあえて尋ねはしなかった。¹³ イエスは来てパンを取り、彼らにお与えになった。また、魚も同じようにされた。¹⁴ イエスが死人の中からよみがえって、弟子たちにご自分を現されたのは、これですでに三度目である。

朝食を共にしている時に、弟子たちは敢えて聞かないほど、この方がイエス様であることを分かっていました。ルカの福音書によれば、イエス様は初めて彼らの真ん中に現れた時に、彼らの前で食事を取られました(24:41-43)。けれども、ここで共に食事をしようと言われていています。ペテロも後に、主がよみがえられてから、共に食事をしたことを証言しています。「使 10:4 民全体ではなく、神によって前もって選ばれた証人である私たちに現れたのです。私たちは、イエスが死者の中からよみがえられた後、一緒に食べたり飲んだりしました。」

食事を共にするというのは、それは平和のしるしであり、和解のしるしでもありました。食事をする時に相手に敵意があって、共に食べることができません。文字通り食べ物が喉を通らなくなりません。敵意を取り除き、共に一つになることを示します。ヤコブに甥ラバンが追い付いてきて、けれども互いに害を与えない契約を結びました。ミツパと呼ばれますが、そこで石塚を造り、「石塚のそばで食事をした。」とあります(創世 31:46)。イエス様が、ライディキアの教会に悔い改めなさいと勧められて、その後、共に食事をするという約束を与えられましたね。主は、弟子たちと食事をされることによって、彼らを平和で満たし、そして、自分たちが主を見捨ててつまずいたことも含めて、関係を修復させたいと願われたのかもしれませんが。

2A 羊飼いへの召命 15-23

1B 三度の愛の確認 15-19

¹⁵彼らが食事を済ませたとき、イエスはシモン・ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたは、この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか。」ペテロは答えた。「はい、主よ。私があなたを愛していることは、あなたをご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの子羊を飼いなさい。」

午前礼拝でじっくりと、主を愛することについてここからお話ししました。イエス様が、ここで、「この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか。」と言われているのは、直訳では、「これらのもの以上に」となりますので、目の前にある魚のことかもしれません。あるいは、日本語訳のようにそこにいる他の弟子たちのことかもしれません。もし前者であれば、主は、ペテロが主への愛が、漁をすることへの愛に優っていなかったと考えられます。主を愛しているのは確かなのですが、第一になっていなかったということです。主のみが私の愛する方です、と、なっていなかったということです。そして、ここで主が使っておられるギリシア語は、「アガパオー」であり、アガペの動詞です。何かをしてくれるから、その条件があるから愛するのではなく、どんなことがあっても、私はイエスを愛しますという決断です。

ところがペテロは、フィレオーで答えていることも午前中に説明しました。フィレオーは、友人愛であり、精神的な愛、共通の興味がある時に使う言葉です。だから、「私があなたのことは、大好きなのは、あなたをご存じです。」と言っているのです。やはり、主に対する深い愛に、ペテロがまだ至っていないことがここで分かります。

そして、イエス様は召命を与えられます。「わたしの子羊を飼いなさい。」これはかつて主が、わたしは良い羊飼いというところで、主の声を聞いてついて行く、主を信じる者たちを示していることを学びました。かつて、主がペテロを召された時は、「マルコ 1:17 人間をとる漁師にしてあげよう。」と言われました。それが、全く性質の異なる牧畜業に移行しなければならない、ということです。もちろんそれは、比喩的なことで文字通りではないですが、けれども、人をとる漁師というのは、魂を

キリストのために勝ち得る伝道者の働きに召したということです。けれども、イエス様の羊を飼うということは、すでに主のものとされた人々を養うということに他なりません。

つまり、牧会の働きです。教会の指導者として立たせられるペテロは、人々を救いに導く伝道者の働きのみならず、人々を養うことによってキリストのからだを建て上げる奉仕に召されています。主は、「子羊を飼いなさい」と言われています。子羊ですから、救われたばかりの人々を意識しておられると思います。そして「飼う」というのは、養うこと、食べさせることです。ペテロは、第一の手紙の中で、そのように勧めている部分があります。「2:2 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」

¹⁶ イエスは再び彼に「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛していますか」と言われた。ペテロは答えた。「はい、主よ。私があなただを愛していることは、あなたをご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を牧しなさい。」

ここでも、イエス様は、「アガパオー」の言葉を使われて、「わたしを愛していますか」と尋ねられています。けれどもペテロは、「フィレオー」の言葉で返しています。やはり、彼は、アガペの愛をイエス様に持っているという自信がなかったのです。しかし、その不足にもかかわらずイエス様は、「わたしの羊を牧しなさい。」と言われます。しかし、主はペテロが自分の力でそれを行なうことは期待しておられません。むしろ、その彼の意欲、自分でしたいこと、願っていることに死に、主の命じられていることに、先に綱を右側に打ったように、ただ従ってほしいのです。自分で導くのではなく、御霊で導かれてほしいのです。

ここでの「牧する」は、世話をするという意味です。食べさせる、養う以外にも、いろいろ世話をしないといけませんね、羊飼いは。救われて霊の乳を飲むだけでなく、しっかりと固い食物も食べられるようにし、そしてキリストの身丈にまで成長するように整えるのです。キリストが牧師また教師をお立てになったのは、「エペ 4:12 聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるため」と使徒パウロは言っています。そして、「4:13 私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。」と言っています。

¹⁷ イエスは三度目もペテロに、「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛していますか」と言われた。ペテロは、イエスが三度目も「あなたはわたしを愛していますか」と言われたので、心を痛めてイエスに言った。「主よ、あなたはすべてをご存じです。あなたは、私があなただを愛していることを知っておられます。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」

ここでは、イエス様は「わたしをフィレオーしていますか？」尋ねておられます。ペテロは、変わら

ずにフィレオーで答えています。ここでイエス様は、ペテロの靈的状态のところまで降りて来てくださいました。主は、成長の遅い者であっても、足並みをそろえて付き合ってください方です。けれども、アガペーではなく、フィレオーの段階で終わってしまったことは残念です。主は、かつてイスラエルの民に対して、王をくださいました。サウルです。その時、王はご自身であり、主のことばによって生きる民は、預言者だけで充分であったのに、周囲の民と同じように王を求めたのです。主が、彼らの靈的状态にまで降りて来てくださったのです。

ペテロは、心を痛めたとあります。主が三度も聞かれるので、「もうご存じのはずなのに、どうして聞かれるのですか？」ということです。しかし、それはもしかしたら、ペテロが三度、イエス様のことを「知らない」と言ったことに対して、イエス様が愛の献身を表明する機会を与えられたのかもしれない。主は、そのようなペテロであるにも関わらず、彼を赦しているだけでなく、立ち直らせ、そして、ご自分の羊を飼ってほしいと願われているのです。ルカの福音書 22 章で、イエス様は十字架に付けられる前に、ペテロがサタンによってふるいにかげられること、けれども主が執り成したことによって、信仰がなくならないようにしていただいたことを話されました。そして、「22:32 ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」とされているのです。

ペテロは、こうやって牧会の召命を受けました。彼の第一の手紙に、牧会者に対する勧めを書いています。手紙や使徒の働きだけを見ると、ペテロはさぞかし靈的な人で、過ちを犯したことがないように見えますが、実は、三度知らないと言った後で、そのことを赦していただき、立ち直ったその直後に、召されたことに基づいていたのです。パウロもそうでしたね、キリスト者に暴力をふるい、捕まえていた迫害をしている最中にイエス様に捕らえられ、人々に福音を宣べ伝える器として召されるのです。失敗の隣り合わせに召しがあります。そして失敗の隣り合わせに、恵みがあり、主の力強い働きの始まりがあるのです。それでは、ペテロ第一 5 章、牧会者に対する勧めを読みます。「5:2-4 あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って自発的に、また卑しい利得を求めてではなく、心を込めて世話をしなさい。割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しぼむことのない栄光の冠をいただくことになります。」

¹⁸ まことに、まことに、あなたに言います。あなたは若いときには、自分で帯をして、自分の望むところを歩きました。しかし年をとると、あなたは両手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をして、望まないところに連れて行きます。」

ここが、ペテロが福音書に出てくるペテロから、使徒の働き以降に出てくるペテロとの違いをよく示しています。これまでのペテロは、「自分で帯をして、自分の望むところを歩きました」というものでした。当時、遠くに歩いたり、走ったり、大きな運動をとまなう行動をする時は、衣の裾を上げて、それを帯で結ぶことをしていました。彼は、自分が主導権を握っていたのです。イエス様について

行っているのですが、自分で自分の歩きたいと思っているところを、その望むままに歩いていたのです。それが、今、「私は漁に行く」という言葉にも表れていたし、それから、「マルコ 14:29 たとえ皆がつまずいても、私はつまずきません。」にも表れていました。こうやって自分で願うところに行っていたんで、そこにある愛には限界があるのです。フィレオーの愛なのです。そして、神のみこころを行なおうとするときに、つまずいてしまうのです。肉の力ですから、結局、神に真っ向から逆らうことをしてしまうのです。

アガペの愛をもってイエス様を愛するということ、またイエス様の召しに応えることは、自分の意欲に拠らないのです。自分の頑張りが足りないのではなく、逆です、頑張っているのが問題なのです。むしろ自分の力、そのプライドを捨てて、裸のままの自分を主の前に差し出し、主の言われるままに連れていかれることです。それが、「しかし年をとると、あなたは両手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をして、望まないところに連れて行きます。」というところに表れています。若い時と年を取るものの対比をイエス様はされていますが、ペテロは靈的に成長しました。それは、自分の願いではなく、主のみこころに明け渡すところの成長です。それは、主が良いお方、慈しみ深い方なのだという信頼の中で、ゆだねていきます。

ですから、こういった中で使徒の働きのペテロを見るのです。彼は、福音書にない、まるで別人であるかのような力強い働きをしているのですが、実際の彼はその逆で、自分が導くのではなく、聖霊に導かれ、自分の望まぬところに連れていかれるようにして、その働きをしていたはずで、自分が失っているので、その分、主がともにおられて働かれています。

¹⁹ イエスは、ペテロがどのような死に方で神の栄光を現すかを示すために、こう言われたのである。こう話してから、ペテロに言われた。「わたしに従いなさい。」

ペテロは、今、言いましたように、第一の手紙で、迫害の中にいるキリスト者に励ましの言葉を書きました。そして彼自身が、殉教します。初代教会の伝承によれば、ペテロは逆さ磔で殉教したと言われています。紀元 64 年、ローマに大火事が起こり、皇帝ネロがキリスト者たちのせいになりました。ローマによる、組織的なキリスト者に対する迫害です。その中で、ペテロは十字架刑の判決を受けますが、「私は主のように死ぬことはできない、卑しい存在だ」として、逆さに磔にされたということです。

イエス様が死なれたことを、主ご自身が「17:1 子の栄光を現してください。」と父に祈られました。ここでも主のゆえに苦しむことが、「神の栄光を現す」とヨハネは書き記しています。ペテロは第一の手紙で、語っています。「4:12-14 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思っははいけません。むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れると

きにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。もしキリストの名のためにののしられるなら、あなたがたは幸いです。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださいからです。」

苦しみの中にある時に、主に対する愛の真価が試されます。本当にこの人は主を愛しているのだ、と人々は確認するのです。栄光の御霊が留まります。ですから、世界の教会史で、また世界各地で、キリストのゆえに苦しむその姿を見て、神の栄光を見て、かえってこの方を信じる人々が起こされていきます。今朝歌った、賛美「我は主に従わん」は、インドにある、ガロ族という部族で、たった一つの家族から部族全体に福音が広まった時の、殉教の時の言葉を歌ったものです。酋長が怒り、本人の前で、子供を殺し、妻を殺し、そして本人を殺しました。もうイエスに従うことを決めた、自分の前には十字架があるのみだ。もう後ろは振り向きませんと言ったのです。その家族の殉教を目にした人々が、イエス様を信じていき、そして酋長自身も信じました。もう百年前の話ですが、今も、ガロ族の人たちの多くが信仰を持ち、熱心に主に仕えています。

そして、ようやく、ここで「わたしに従いなさい。」と言われます。ここで、イエス様は、「自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従いなさい。」という言葉の本当に意味するところをペテロに教えられました。

2B 各々を呼ばれる方 20-23

²⁰ ペテロは振り向いて、イエスが愛された弟子がついて来るのを見た。この弟子は、夕食の席でイエスの胸元に寄りかかり、「主よ、あなたを裏切るのはだれですか」と言った者である。²¹ ペテロは彼を見て、「主よ、この人はどうなのですか」とイエスに言った。

ペテロは、主に従うにあたって、再びすぐに過ちを犯しています。自分が従いなさいと言われたのに、他の人はどうなのか？と尋ねているからです。そのついて来ている人は、ヨハネですね。ヨハネは、自分のことを思い起こさせるのに、最後の晩餐でイスカリオテのユダが裏切る時に、「夕食の席でイエスの胸元に寄りかかり、「主よ、あなたを裏切るのはだれですか」と言った者である」と説明しています。13章を学んだ時に、その席の配置について学びましたね。ヨハネは主の御胸のところに寄りかかって尋ねていました。それだけ、主の鼓動が聞こえてきそうな、とても近いところにいたことを表しています。

²² イエスはペテロに言われた。「わたしが来るときまで彼が生けるように、わたしが望んだとしても、あなたに何の関わりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」

もしかしたら、ペテロはヨハネと、ちょっとした競争心を持っていたかもしれません。しかし、愛の本質は、「あなたがイエスに愛されている」というところなのです。自分自身が主に召されているということなのです。パウロは、エペソからの長老に対してこう言いました。「使徒 20:24 私が自分の

走るべき道のりを走りつくし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは惜しいとは思いません。」自分の走るべき道のりであり、他の人にはその人の走るべき道のりがあります。自分自身が、主に忠実に従えるのかに集中するのです。

²³それで、その弟子は死なないという話が兄弟たちの間に広まった。しかし、イエスはペテロに、その弟子は死なないと言われたのではなく、「わたしが来るときまで彼が生きるように、わたしが望んだとしても、あなたに何の関わりがありますか」と言われたのである。

ヨハネは、90年代まで生きていたイエス様の証人です。それで、ヨハネを軸にして、彼が生きていううちに主イエスが再臨するかもしれないという噂が広まっていました。そして、ここでのイエス様の言葉がその根拠とされていたのです。けれども、ヨハネは、それは誤解であり、イエス様がそう望んだとしても、何の関わりがあるのか、と言われたにすぎないとしています。思い出すに、牧者チャック・スミスも、主がすぐに戻って来てくださるといつも強調していましたが、「チャックが死ぬまでには、携挙が来ると思っていたのに。」という人がいましたね。これと同じです。主が間もなく来られるという期待が強いために起こった、誤解です。それだけ再臨は切迫性にあるものですね。

3A ヨハネの証言 24-25

²⁴ これらのことについて証しし、これらのことを書いた者は、その弟子である。私たちは、彼の証しが真実であることを知っている。

ヨハネは、これが真実であることを証言するために、このような客観的な書き方をしています。ヨハネ自身が証言しているだけでなく、他の人たちもそれが真実だと確認できているということを強調しています。

²⁵ イエスが行われたことは、ほかにもたくさんある。その一つ一つを書き記すなら、世界もその書かれた書物を収められないと、私は思う。

ここで、個人の感想を述べていますね。イエス様の行われたことのすべてを、ここで書いたわけではないのだということを話しています。20章の最後、30節でも「ほかにも多くのしるしを行われたが、それらはこの書には書かれていない。」と言っていました。ヨハネは、本当にそのわずかなものだけを取捨選択して書き残した、ということです。

私たちは、このヨハネの証言をその通り受け入れて、そして自分たちの人生で確認してきます。御霊が与えられていて、真理であると確認しているのです。「Iヨハ 5:6 この方は、水と血によって来られた方、イエス・キリストです。水によるだけではなく、水と血によって来られました。御霊はこのことを証しする方です。御霊は真理だからです。」